

---

## II.

---

# 第2次大戦期に関する日本側・タイ側の資料と研究成果

---

村嶋英治

---

### I. 日本側資料と研究成果

#### 1. 外交史料館

明治初期以来の外務省文書（外務省記録）は、既定の分類方法・分類番号に従い、案件毎に同一ファイルにまとめ、分類番号を付して保存。多くは公信公電の草案・完成版、及びそのための関連資料から成るが、政策決定に至るプロセスが判明しないものも多い。このうち、1930年代半ば以降終戦までの機密を要する重要な文書は、敗戦直後に組織的に破壊された。破壊された中には、1930年代半ば以降1945年に至る日タイ政治軍事関係の文書も含まれる。その後、残った文書は上陸したアメリカ占領軍により接収され、アメリカに運ばれ多くはマイクロフィルム化された。

戦後、個人等が所蔵していた公文書（日本官庁の情報管理の杜撰さのお陰）で外交史料館に寄贈されたものが、本来あるべきファイル中に戻されている。しかし、それは極く一部であり、殆どのファイルは分類番号とタイトルだけが残り、文書はカラである。

戦時中の日本外務省と在外公館との間の公電は残存している現物は極めて限られている。E. Bruce Reynolds, *Thailand and Japan's southern advance, 1940-1945*, St. Martin's Press, 1994, は、ワシントンのナショナル・アーカイブ（NA）所蔵の“Magic” documents（SRDJ）資料（戦中の日本の外交電報をアメリカが解読英訳したもの。但し、誤訳珍訳翻訳不能箇所もあり）を多用し、日本の外交公電資料の欠如を補った。同書は、この分野の研究の基本書である。彼には、自由タイ運動をテーマとして、ワシントンのNA及びロンドンのNAの史料を精密に用いたE. Bruce Reynolds, *Thailand's secret war: the Free Thai, OSS, and SOE during World War II*, Cambridge University Press, 2005の著作もある。

日本人の自由タイ研究には、市川健二郎『日本占領下タイの抗日運動：自由タイの指導者たち』（勁草書房、1987年）があるが、主に刊行された英語文献のみに拠ったもので、本格的な研究とは言い難い。台湾の国史館や中国国民党党史館の史料を用いれば、新しい自由タイ研究ができるはずである。タイ人若手歴史研究者 Wasana Wongsurawat が、台湾の史料を一部利用している。

外務省記録のインデックスとして、『外交史料館所蔵外務省記録総目録：戦前期 第1巻（明治・大正篇）』、『外交史料館所蔵外務省記録総目録：戦前期 第2巻（昭和戦前篇）』がある。また、外交史料館は戦中に駐タイ大使であった山本熊一の遺稿（A700, 9-69）など、戦後の個人文書も保存している。

#### 2. 防衛研究所図書館

日本官庁の文書管理の杜撰さは軍においても例外ではなく、戦前において既に明治以降の日本軍の文書の相当数は外部に持ち出され散逸していたと考えられる。例えば、明治20年代の福島安正（当

時大佐、後大将)の幾多の海外出張(含む1897年1月～2月の暹羅・安南調査)の参謀本部宛報告書、1893年7月～10月の上原勇作(当時少佐、後元帥)の暹羅・安南出張参謀本部宛報告書などは、太田阿山編『福島將軍遺績』(東亜協會、1941年6月)、荒木貞夫編『元帥上原勇作伝(上・下)』(元帥上原勇作伝記刊行会、1937年)、などの記述から見て、1930年代には参謀本部は所蔵していなかったと考えられる。

日本軍は、外務省と同様、敗戦後米占領軍上陸前に、明治期以来の保存文書を自ら破壊した。外務省記録の破壊は1930年代から戦時中の主要文書に限られているが、日本軍が破壊対象とした文書は、明治期以降の全文書であった。破壊命令に従わず隠匿された文書として、大本営政府連絡会議等の筆記である参謀本部編『杉山メモ、上、下』(原書房、1967年)、『機密戦争日誌：大本営陸軍部戦争指導班』(軍事史学会編、錦正社、2008年として刊行)などがあり、この中にはタイ・インドシナ関係のものも少なくない。Eiji Murashima “The Commemorative Character of Thai Historiography: The 1942–43 Thai Military Campaign in the Shan States Depicted as a Story of National Salvation and the Restoration of Thai Independence,” *Modern Asian Studies* (Cambridge UP), Vol. 40 no. 4 (Oct. 2006) pp. 1053–1096 は、機密戦争日誌などを用い、タイ側の資料と対照している。

防衛研究所図書館保存資料の多くは、防衛庁防衛研修所戦史室著『戦史叢書』(全102巻、1966年～1980年刊行)編集のために、戦後に収集された私文書、公文書である。私文書(大本営参謀等の業務日誌等)を丹念に読むと、タイ関係でも戦史叢書に掲載することを取って避けたと思われる事象(とりわけ開戦前後)や、不正確な記述も間々あり、依然として研究の余地がある。

### 3. 刊行・未刊行資料

#### 刊行物

中村明人(在タイ39軍、18方面軍司令官)『ほどけの司令官、駐タイ回想録』日本週報社、1958年6月  
本書は、村嶋がナカリン・メーカーライラット氏の協力を得て

ผู้บัญชาการชาวพุทธ ความทรงจำของนายพลนากามุระเกี่ยวกับสมัยสงครามมหาเอเชียบูรพา のタイトルでタイ語訳し既に3版(1991, 2003, 2012年)を重ねている。

本書の基になった中村明人中将の回想録は、中村明人「駐泰四年回想録」(防衛研究所図書館、南西／泰仏印／5-7)である。

南方会(日本銀行の戦中タイ派遣者の会)『南方の思出』(非売品、1969年)

吹野憲昭『忘れ得ぬチェンマイ、従軍記録』(広陽出版社、1983年)

宮崎雄一(戦中三井物産バンコク支店勤務)『カサリーナの樹に風騒ぐ』(同時代社、1985年)

片山博『秘められた日タイ戦：戦跡巡拝記』(タイ国戦跡巡拝団、1986年)

元南方軍第16陸軍病院戦友会『メナムの夕映え』(西宮、非売品、1991年)

岩崎陽二(大川周明塾卒業後タイ派遣)『マーマイ(又来いよ)、私の歩いた道』(大分、非売品、1992年)

など。

フィクションも加えた読み物なので歴史史料としては使えないものとして、  
 岩城政治『悔いなき同盟』（雪華社、1963年）  
 平等通照，平等幸枝『我が家の日泰通信：愛は死を越えて』（印度学研究所，1979年）

### 未刊行手記類（村嶋所蔵分）

堀井龍司（在タイ憲兵隊副隊長）「憲兵隊勤務の回想，第二部，タイ国駐屯憲兵隊勤務の思い出」  
 原寿雄（第18方面軍参謀）「備忘録，青年将校時代」  
 「新田義実日記」（新田は戦中，日本タイ商工会議所会頭）  
 逆瀬川澄夫（大川周明塾卒業後タイ派遣）「私の一生 前期（戦前篇）3（別冊）」  
 逆瀬川の上記自伝は，玉居子精宏『大川周明アジア独立の夢：志を継いだ青年たちの物語』（平凡社  
 新書651，2012年）でも紹介されている。

## II. タイ側資料と研究成果

### タイ国立公文書館（National Archives of Thailand, NAT）

#### 1. 国軍最高司令部文書（NAT Bo.Ko. Sung Sut, Supreme Command Documents）

タイ仏印紛争・大東亜戦争中に，ピブーン元帥を長とする国軍最高司令部が設けられ，この下に置かれた対日連絡所を通じて，戦時中のタイ軍と日本軍との連絡は行われた。本文書には，戦時中の日タイ間の様々な軍事協定，日タイ両軍代表間の協議の議事録（軍事，経済，文化，犯罪など多方面）などが含まれ膨大なものである。この文書は故吉川利治教授が，日本の財団（トヨタ財団？）と話しをつけ，NATに整理経費を提供したことで，文書の整理が進み，1990年前後に公開に至った。

本文書の公開に尽力した吉川教授は，本文書を用いて，吉川利治『泰緬鉄道：機密文書が明かすアジア太平洋戦争』（同文館出版，1994年）を遺した。但し，同氏の研究は総じて大まかで，本文書解説上多くのミスがあることは，本文書のオリジナルと対照した村嶋が指摘している（村嶋英治「日タイ同盟とタイ華僑」、『アジア太平洋研究（成蹊大学）』第13号，1996年，58-59頁の注69参照）。吉川教授の本文書利用は，泰緬鉄道関係のみに限られている。

本文書を利用して，村嶋は，Eiji Murashima “The Thai-Japanese Alliance and the Chinese of Thailand,” Paul H. Kratoska ed. *Southeast Asian Minorities in the Wartime Japanese*, Cruzon. 2002, pp. 192-222, を書き，これに更に詳細を加えてタイ語で，*เอเชียภูมิภาค “สัมพันธมิตรไทย-ญี่ปุ่นกับชาวจีนในประเทศไทยสมัยสงครามโลกครั้งที่สอง”* ชาญวิทย์ เกษตรศิริ ฮายะโอะ ฟุกุย eds., *ญี่ปุ่น-ไทย-อุษาคเนย์ มุขนิธิโครงการตำราฯ* 1998, pp. 111-200. (Hayao Fukui, Charnvit Kasetsiri eds, *Japanese Scholarship on Thailand and Southeast Asia* (in Thai), 1998年1月刊) として発表した。

最近，柿崎一郎は本文書中の鉄道輸送に関するものを用いて，多数の資料提供を行っている。例えば，柿崎一郎「第2次世界大戦下の鉄道をめぐる日タイ間の攻防：タイはいかに列車運行を奪還・維持したか」(Scramble for Thai Railways between Thailand and Japan during World War II: How Did Thailand Recapture and Maintain Its Train Operations?), 『東南アジア研究』 vol. 52 no. 2 (2015), pp. 137-171.

「第2次世界大戦中の日本軍によるタイの一般旅客列車の利用：日本軍への請求書の分析」(Use of

Civilian Passenger Trains by Japanese Army in Thailand during World War II: Analysis of the Bills for Military Transport), 『年報タイ学会』(The Journal of Thai Studies) 14号, 2014年, pp. 25-46, など。

なお、柿崎一郎は、2016年-2020年度の5年間「第二次世界大戦中の日タイ同盟の実像に関する研究」(科研基盤研究(C), 課題番号16K01993)の助成を得ている。

タイ人パニー・ブアレック(Panee Bualek)は、国軍最高司令部文書を使ってタイ語で、*Japanese Imperialism and the Development of Thai Capitalism during the Interwar Period* (1997, in Thai) を著し、戦中における日本人の在タイ経済活動の一部を明らかにした。戦時中の日本人の経済活動研究は未開拓の分野であり、例えば本資料に加えて、タイ官報に掲載されている日本人による会社設立登記や日本外務省記録の旅券下付表を用いれば、より詳細が明らかになるはずである。

なお、最高司令部文書中には、各種の日タイ軍事協定(日本語・タイ語)が保存されている。戦時中の日本現地軍とタイ軍との軍事協定は、僅かな一部を除き日本には保存されていないので貴重である。NATの国軍最高司令部文書とは別に存在する、タイ海軍アーカイブの資料中にも多くの日タイ軍事関係の文書が含まれており、両者を利用すれば、戦中の日タイ軍事協力がより立体的に理解可能である。村嶋は、これらの両資料を既に収集しているが、未発表である。

## 2. 内閣 (So Ro, (2) So Ro) ・各省庁文書 (主に Ko.To, (2) Ko.To)

NATの本ファイルを用いた日本人の研究としては、大戦期のタイとインドシナとの関係について、Eiji Murashima “Opposing French Colonialism: Thailand and the Independence Movements in Indochina in the Early 1940s,” *South East Asia Research* (SOAS), Vol. 13 No. 3, Nov. 2005, pp. 333-383. Eiji Murashima “Thailand and Indochina 1945-1950,” *Journal of Asia-Pacific Studies* 『アジア太平洋討究』 No. 25, Dec. 2015, pp. 137-176.

また、タイ人共産主義者へのインタビューに加え本文書を用いた研究として、Eiji Murashima “The Young Nuon Chea in Bangkok (1942-1950) and the Communist Party of Thailand: The Life in Bangkok of the Man Who Became “Brother No.2” in the Khmer Rouge,” *Journal of Asia-Pacific Studies* 『アジア太平洋討究』 No. 12, March 2009, pp. 1-42.

本論文は、Prakan Klinfoogによって、下記論文としてタイ語訳されている。

เอธิจิ มุราชิม่า เขียน ปรากกร กลิ่นพืง แปล “นวน เจียวัยหนุ่ม กับพรรคคอมมิวนิสต์แห่งประเทศไทย (2485-2493): ชีวิตใน กรุงเทพฯ ของชายผู้กลายเป็น มาเป็น ‘Brother No. 2’ ของเขมรแดง” ฟ้าเดียวกัน ปีที่ 9 ฉบับที่ 1 มกราคม มีนาคม-2554

NAT史料も用いた大戦期の日本の文化政策に関しては、加納寛の博士論文「タイにおける文化政策の展開」(名古屋大学, 2004年)がある。加納寛は、2015年-17年度「対タイ宣伝活動の諸相とタイ側の反応：戦時期日本の東南アジア関与とその変化」(科研基盤研究(C) 課題番号15K02876)の助成を得ている。

なお、下記岸本の研究も貴重な研究であるが、史料は日本側だけに限られている。岸本昌也「日タイ『宗教』外交の展開—昭和一八年仏舎利奉遷をめぐって—」, 『年報・近代日本研究・17 (政府と民間—対外政策の創出)』, 山川出版, 1995年, pp. 283-322.

10年ほど前に公開された(2) Ko.To文書中には、1942-45年における日本・タイ・南京政府の3

者の関係が判る文書も含まれる。この種の文書は、日本には保存されていない。

### 3. タイ外務省図書館から NAT に移管された WW2 文書

第2次大戦期のタイ外交文書は、10年ほど前に、タイ外務省図書館から NAT に移管された。外務省図書館で保管されていた当時、この文書全体は WW2 文書と称されていたが、村嶋は1992年から94年にかけて丸一年以上をかけて外務省図書館に通い、WW2 文書全てを閲覧して、下記論文を書いた。村嶋英治「日タイ同盟下の軍費交渉 1941～1944」(Military Expenditure Negotiations under the Japan-Thai Alliance Pact of 1941-1944 [in Japanese]) *東南アジア歴史と文化* No. 21, pp. 30-64, 1992-06.

村嶋英治「日タイ関係 1945-1952 年—在タイ日本人及び在タイ日本資産の戦後処理を中心に」Japan-Thai Relations 1945-1952—Repatriation of Japanese and Disposal of Japanese Property in Thailand— [in Japanese], *Journal of Asia-Pacific studies* No. 1, pp. 141-162, 2000-01.

NAT では、WW2 文書のインデックスを既に完成したということなので、間もなく公開されるものと思われる。この文書中には、日本軍及びタイ政府が接収した敵産（主にイギリス資産）の処理に関する大量の資料があり、タイ経済史研究の資料として貴重である。

なお、村嶋が見た限り、タイ側の公文書（NAT 文書、外務省 WW2 文書）中には、1941年12月～42年1月における日タイ同盟条約交渉に関する資料は一切存在しない。これらの文書は、関係者によって破壊若しくは秘匿されたか、タイ外務省条約局で依然保管（非公開）しているか、であろう。タイ外務省条約局は、19世紀以来の国境確定に関する全外交文書を依然保管（非公開）している。また、NAT に移管された文書でも国境画定に関係する文書は非公開である。

タイでは、閣議の議事録が作成されており、内閣事務局が保管（外国人研究者には公開されていないが、タイ人研究者には公開）している。1941年12月～42年1月の閣議議事録（日タイ同盟条約に関する議論を含む）は、曾て一部が民間出版社によって印刷されたことがあるが、現在は紛失していると言う。

NAT の外、タイ外務省図書館は 1940-41 年 Indochina 戦争文書を保存、またタイ海軍アーカイブには、未利用の多くの文書が保管されているようである。

また、タイ共産党政治局員であった Damri Ruangsutham คำรินทร์ เรื่องสุธรรม ขบวนการแรงงานไทยในการต่อต้านกองทัพญี่ปุ่นในสงครามโลกครั้งที่ (第2次大戦期在タイ日本軍に対する抗日労働運動) สุขภาพใจ, 2001 年、はタイ共産党による戦中の日本人工場におけるサボタージュと終戦直後の日本資産の略奪などを回想している。

### 4. 失われたオーラル・ヒストリの機会

第2次大戦期の日タイ関係に関する、時間をかけた本格的な調査研究は、1980年代後半から1990年代にかけて、E. Bruce Reynolds および村嶋英治によって行われたのみで、これ以前及びこれ以後においては、同程度の調査は行われていない。同様の評価は、Shane Strate “An uncivil state of affairs: Fascism and anti-Catholicism in Thailand, 1940-1944” (*Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 42 no. 1, 2011) などにも記されており、村嶋の自己評価が必ずしも手前味噌ではないことが判る。

E. Bruce Reynolds の調査は、主に日本語・英語文献及び日本人タイ人へのインタビュー、村嶋の

村嶋英治

調査は、主にタイ語・日本語文献、日本人へのインタビューである。日本人へのインタビューは、Bruce Reynolds が先行し、村嶋のインタビューは Bruce からの情報提供によったものもある。その成果を Bruce は 2 冊の大著として発表しているが、村嶋はいくつかの論文を書いただけで、別のテーマ（タイ仏教、1930 年代タイ共産主義運動、19 世紀後半のタイ内政外交、同時期の日タイ関係など）に取り組んだので、村嶋が収集した資料の多くは未発表のままとなっている。将来、19 世紀後半以降の近代日タイ関係史の著作のなかで利用する予定である。

村嶋は、1990 年前後のインタビュー当時、高齢ながら生き残っていた日本人関係者（39 軍・18 方面軍の参謀、駐タイ憲兵隊、中野学校出身者、大川周明塾出身者、大使館員、文化工作者、経済人など）の主要な人々にインタビューの機会を得たが、1941 年開戦当時の大使坪上貞二（1884-1979）など、戦中の日タイ関係のトップリーダーたちは物故しており、インタビューを行うことができなかった。